

Editor's eye

・特集・

アトピー性皮膚炎の 役立つ最新情報

編集担当 向井 秀樹

アトピー性皮膚炎(atopic dermatitis: AD)治療の進歩は目覚しく、2018年のデュピルマブ(Dup)発売以来、JAK阻害薬や抗IL-31阻害薬など、日常診療で種々の選択肢が増えている。今後さらなる新薬の発売も予想され、長年苦しめられてきた重症AD患者の人生を変えるブレイクスルー治療薬になりうると期待している。

本特集号注目の読み物は、西岡清先生の総説「外用薬開発の歴史」である。紀元前5000年という太古の時代から外用療法は始まっており、その後の変遷や処方内容まで具体的に紹介され、さらに現在から将来の外用薬の可能性までに言及。“古き外用療法が姿を消し、外用療法のノウハウが継承されず残念”と述べている。現在多くの患者に投与されているDupは高い有用性を有するも、その出口戦略の報告はみない。「研究1」は患者ファーストな試みだが、「声」の欄にご意見をいただきたい。「研究2」を執筆された本田哲也先生は、固定薬疹や乾癬皮疹の再燃に関与するレジデントメモリーT細胞が、ADにも存在するという。乾癬と異なり半数は真皮にみられ、表皮肥厚や再発に関与するが、現段階ですべての役割は明らかとはいえず、今後の研究が待たれる。成田雅美先生の「展望」では、皮膚バリア機能障害と腸管・皮膚細菌叢を標的としたADの発症予防の現状をわかりやすく解説している。

「臨床例」をみると、昨年のAD特集号に比してJAK阻害薬関連の症例が増えている。獅子様顔貌を呈する重症AD、アトピー性脊髄炎、青年期ADやAD合併の円形脱毛症例などの有効例が目につく。一方、Dupについてはステロイド外用による眼圧上昇例に有用であること以外は、投与による乾癬様皮疹やぶどう膜炎の発症、薬疹といった副反応が興味深い。発売5年を経て、種々の問題点に目を向けるべきと考える。

抗IL-31阻害薬が適応となるAD症例に悩まれる先生も多いと耳にする。驚くべき効果が期待されるのは内因性や血清IgE低値の痒疹型ADとされ、試す価値がある。今年1月号「コロナワクチンと皮膚病」が好評だったが、本特集号も乾癬患者がワクチン接種後にAD様紅皮症を呈した例、AD患者の外陰部に若年発症の有棘細胞癌を発症した例などを紹介しており、日常診療に役立つ特集号となっている。ぜひともご一読いただきたい。